

1 対象機関の概要

滋賀医科大学は、昭和49年（1974年）10月、国の一県一医科大学構想のもとに、医学部医学科のみの単科医科大学として、滋賀県大津市瀬田月輪町に設立された。その後平成6年（1994年）4月には医学部看護学科が設置され、1学部2学科となった。現在医学部医学科における学生の定員は595名、入学定員95名、第2年次後期編入学定員5名であり、医学部看護学科の収容定員は260名、入学定員60名、第3年次編入学定員10名である。学長、副学長（2名）、外国人教師（1名）、教務職員（8名）を含めた専任教員数は282名であるが、医学部附属病院に所属する教員を除くと174名となる。このうち、専門教育科目以外のいわゆる一般教育科目等を主として担当する学科目教官は、教授7名、助教授7名の計14名（現在1名欠員）に、助手3名、教務職員3名、外国人教師1名を加えた合計21名である。

いわゆる新設医大の一つであるが、すでに医学科は本年第21期の卒業生を送りだし、卒業生は医学・医療の分野の第一線で広く活躍している。看護学科も第4期の卒業生を送りだし、卒業生は看護婦（士）や保健・福祉の領域で活躍を始めた。

滋賀医科大学には、教育機関として医学部以外に滋賀医科大学大学院医学系研究科があり、博士課程と修士課程がおかれている。また、種々の研究補助センター以外に分子神経医学研究センターを有する研究機関でもあり、附属病院を有する医療機関でもある。

2 教養教育に関する考え方

滋賀医科大学はその名称の通り医学部のみからなる大学であり、その卒業生は、医学科からは医師に、看護学科からは看護婦（士）になるものが圧倒的に多く、学問や行政の道に進むものを含めてもほとんどすべてが広い意味での医療の分野に限られるといっていよい。医学・看護学という分野は、自然科学と人文・社会科学のしっかりした基礎の上に築かれる高い専門知識と技能を必須とする分野であると同時に、患者という人の生命を直接の対象とする職業であるだけに、確固たる倫理観と幅広い教養を身につけることが求められる。このことは、本学で「基礎学課程」と称する一般教養担当教官のみならず、医学・看護学の専門課程教官を含めたすべての構成員が一致して持つ認識である。したがって、大綱化以降多くの大学で繰り上げられたような「教養不要論」は本学ではまったく起こらなかった。

しかし一方では、本学に入学した学生の間に、「医学部に入ったのに、高等学校と同じ講義の繰り返しだ」との不満がある。これは誤解に基づくものであるとはいえ、入学当初の高まったモチベーションを有効に利用する方策は講じなければならない。また、最近の分子生物学分野の発展は目覚ましいものがあり、医学を学ぶために必要とされる基礎知識も年々増大しつつある。これらの環境のもと、教養教育のカリキュラムにも、医学や生命科学の基礎の教育を目的とする科目が数多く含まれるようになった。すなわち、本学においては、教養教育を医学・看護学の高くかつ最先端の専門的知識と技能を学ぶための基礎教育と、医療人としての確固たる倫理観や幅広い教養を培うことととらえている。

3 教養教育の目的及び目標

(1) 目的

滋賀医科大学学則第1条には、「滋賀医科大学は、教育基本法及び学校教育法に基づき、幅広い教養と医学及び看護学のそれぞれの領域に関する高い専門的知識及び技能を授けるとともに、確固たる倫理観を備え、有能にして旺盛な探求心を有する人材を育成することを目的とし、もって医学及び看護学の進歩、発展に寄与し、併せて社会の福祉に貢献することを使命とする。」とある。これは、本学創設の際に編集された「滋賀医科大学の構想」にまとめられた目標、すなわち「医学部は、広い教養の上に医倫理を身につけ、科学的探求心に富み、しかも医師としての基本的な能力を身につけた医師を養成することを目標とする。」に由来している。この理念は本学教官が繰り返し耳にする文章であり、全学的に共有された本学の教育目標といって間違いない。したがって、ここから導かれる本学の教養教育の目的は、「確固たる倫理観とその基礎となる幅広い一般教養、高い専門的知識及び技能を学ぶための基礎となる専門基礎学力、ならびに有能にして旺盛な探求心を養うこと」といえる。社会が医師及び看護婦（士）などの医療人に求めるものも、畢竟ここに尽きると考えられ、大学改革の方向性の如何に関わらず不変のものであろう。

滋賀医科大学がこの目的を実現するために設定する目標は、したがってまず確固たる倫理観、幅広い一般教養、専門的知識及び技能を学ぶための基礎となる専門基礎学力、ならびに有能にして旺盛な探求心の育成ということになる。さらには、新しい時代の教養にとって重要な情報収集能力とコミュニケーション能力の育成をも新たな目標として加える必要がある。

(2) 目標

1) 確固たる倫理観の育成

医療の道に進む学生にとって確固たる倫理観の育成が重要であることは、本学教職員のすべてが認識しており、そのことは、たとえば数少ない一般教育担当学科目教官の中で、常に哲学（倫理学）の教官を保持し続けたことにも現れている。現行のカリキュラムにおいて開講している哲学関連授業科目は、医学科が2科目4単位、看護学科が1科目2単位であるが、ほかに社会学（医学科3科目6単位、看護学科2科目4単位）の中でも、特に医療倫理に重点を置いた取り組みがなされている。さらに医学科では、「医学史」で医療を歴史的に学び、特に「医学概論Ⅰ及びⅡ」においては、医療倫理や患者の人権などの問題を正面から取り上げるとともに、早期体験学習によって医療現場の中で医の倫

理について考える機会を持つ。看護学科も、「基礎看護理論」や「人間関係論」において医の倫理を学ぶとともに、1年生の前期から「基礎看護実習Ⅰ」において現場での経験を積む。また本学では、解剖学実習での献体に関連する種々の行事に学生の参加を求めているが、解剖体慰霊式には医学科及び看護学科の1年生も参加しており、生命倫理を身につける一助となっている。

このように、倫理観の育成に関して本学では十分な取り組みがなされている。

2) 幅広い一般教養の育成

医学科においては、一般教養科目のうち「基礎人間科学」区分に26科目を開講し、その中から1年半の間に13科目26単位を選択必修することを進級の条件とすることによって、幅広い一般教養の育成を目指している。また看護学科においては、「人文科学」と「社会科学」区分のそれぞれで5科目を開講し、そのうちそれぞれ4科目8単位を1年間で習得することを求めている。単科医科大学の問題点の一つはこれらの授業科目を担当する教官数の不足であって、これらの科目のうちの相当数を非常勤講師に頼らざるを得ない。さらに大きな問題点は、多くの学生の消極的・受動的な受講態度であって、これの克服が大きな問題となる。これに対応する現行カリキュラムの新しい動きとして、少人数能動学習の採用がある。新しく開講した「人間科学研究」においては、人文・社会科学分野の諸ジャンルの中から、学生が主体的にテーマを設定し学習を進める試みを行う。その成果が注目される。

3) 高い専門基礎学力ならびに旺盛な探求心の育成

広い領域の自然科学にその基礎を置く医学にとって、高い専門的知識及び技能を身につけるためには、数学・物理学・化学・生物学のすべての分野において基礎となる必須の知識が要求される。これらは現行のカリキュラムにおいて「基礎生命科学」区分とされ、講義16科目32単位と実習3科目3単位が開講されており、1年半の間に25単位を選択必修することを求めている。特に現代の医学にとって必要欠くべからざる生物学関連3科目と「基礎有機化学」、ならびに物理学・化学・生物学の実習3科目は必修とされている。さらに進歩の著しい現代医学・生命科学を概観する目的で、「医学・生命科学入門」を開講している。現代医学の急速な進歩が自然科学の最先端の知識に依存していることを考えるならば、必ずしもこれで十分とは言えないまでも、最低限の知識の習得が可能と考えている。問題点はやはり学生の主体性の少なさであるが、これに対処するため、人文・社会系での「人間科学研究」と対応して自然科学においても少人数能動学習の試みが始められた。本学は創立以来実習を重視し、平成11年度までは3教科それぞれ2科目の実習を必修として課し

てきたが、これをそれぞれ1科目へと減少するとともに、3教科合同で学生の自発的な学習に重きを置く「基礎科学研究」を開講した。「人間科学研究」とともに、本学教養教育の目標の一つである有能にして旺盛なる探求心を養うことをも目指したものであり、成果を期待している。さらに学生の意欲を駆り立てる目的で開講された「医学特論」は、現代医学の最先端のトピックスを選びそれぞれの分野の第一人者を招き講演を願うものであり、新入生のモチベーションを高めることを意図している。

4) 情報収集能力及びコミュニケーション能力の育成

新しい時代の教養にとって、情報収集能力とコミュニケーション能力の育成は見逃すことのできない目標となった。情報収集能力に関しては、本学は開学以来「情報処理学」を開講し、医学科、看護学科の両者において、平成6年度からは1人1台のパソコンを使ったコンピュータ教育を行ってきた。さらに看護学科においては「医療情報論Ⅰ及びⅡ」を開講している。学生のすべてが入学と同時にメールアドレスをもつという環境を作り、学生の情報収集能力の育成に力を注いでいる。

コミュニケーション能力に関しては、まず外国語教育の充実がある。医学科においては、英語を「外国語科目Ⅰ」と区分して英語及び英語実習をそれぞれ3科目開講するほか、「外国語科目Ⅱ」区分において、専任教官によるドイツ語以外に、非常勤講師に依頼してフランス語、中国語をそれぞれ4科目ずつ開講し、選択の幅を広げている。さらに第3学年において「医学英語」を開講し、情報収集のみならず情報発信へ向けての教育も行っている。また新たに「日本語表現法」を開講し、コミュニケーション能力の育成を目指している。看護学科においては、外国語科目としては英語、英語実習、ドイツ語をそれぞれ3科目開講している。また、「人間関係論」、「コミュニケーション論」を開講し、コミュニケーション能力の育成を図っている。

4 教養教育に関する取組

(1) 実施体制

本学では、平成9年12月に学内措置として「総合教養教育機構」を設立し、教養教育に取り組んできた。総合教養教育機構は、教養教育を全学的視点から企画・立案・調整・運営する目的で設立された組織であり、学長、教育・研究担当の副学長、教養教育の授業を担当する全教官（専門課程教官を含む）を構成員とし、学長を機構長とする組織である。機構の運営には、基礎医学及び臨床医学の医学科専門課程の教官4名と看護学科専門課程の教官2名が加わって運営委員会を構成し、毎月1回、定期的に委員会を開催している。委員の構成からもうかがえるように、総合教養教育機構は、「教養教育に対する全学的な関心を喚起すること」、「教養教育と専門教育の有機的な連携を図り、医学・看護学の観点から教養教育を構築すること」、「専門課程の教官が積極的に教養教育を担当することにより1年次学生の医学・看護学に対するモチベーションを高めること」等を運営の基本的理念としている。設置以降、具体的には、総合教養教育機構を中心にして基礎学課程のカリキュラム改革とファカルティ・ディベロップメント推進に取り組んできた。

(1) カリキュラム改革について：平成12年度より実施している新カリキュラムの策定により、「医学特論」、「医学・生命科学入門」、「人間科学研究」、「基礎科学研究」、「細胞生物学」、「日本語表現技法」などの開講、「医学概論Ⅰ、Ⅱ」の見直し等を行った。

(2) ファカルティ・ディベロップメント：教養教育に関するファカルティ・ディベロップメントを図るためのワークショップを、平成11年度及び12年度に開催した。平成11年度のワークショップでは、「滋賀医科大学における教養教育の実態が大学の理念に合致しているか現状分析を行い、問題点を浮き彫りにして改革の道を探る」ことが目標であったが、臨床医学や看護学科からの参加者も得て、教養教育の実情や将来像について活発な議論が交わされた。平成12年度のワークショップでは、「教養教育における少人数教育の可能性を探る」こと等を討議し、その結果として、「人間科学研究」や「基礎科学研究」の新設に至った。

(3) 学生による授業評価：授業評価については、総合教養教育機構でもたびたび議題に取り上げられたが、平成12年度には、基礎医学、臨床医学、看護学の各専門課程を含めた大学全体で初めて実施された。前期と後期それぞれの最終授業時に、教官と授業を評価する2種類のアンケートを取るという方法で行った。集計結果は各教官に通知されるとともに、特に問題があっ

たと判断された教官に対しては、フィードバック委員会により指導がなされた。平成12年度は、教官、学生、事務官とも意欲的に取り組み、一応の成果があがったと思われるが、将来とも学生による授業評価を継続し、これを教育内容の改善に有効利用していくためには、アンケート内容の見直しや、マークシート読み取り装置の導入などを行いつつ、その結果を注意深く見守る必要がある。

(2) 教育課程の編成及び履修状況

医学科基礎学課程の科目編成は、平成12年度より下記の5区分となっている：

a「基礎人間科目」、b「基礎生命科学」、c「外国語科目Ⅰ」、d「外国語科目Ⅱ」、e「総合生命科学」。

看護学科は、現在のところ下記の6区分となっている：

a「人文科学」、b「社会科学」、c「自然科学」、d「外国語科目」、e「保健体育科目」、f「総合科目」。

(1) 編成上の基本方針

先に述べた、1) 確固たる倫理観の育成、2) 幅広い一般教養の育成、3) 高い専門基礎学力ならびに旺盛な探求心の育成、4) 情報収集能力及びコミュニケーション能力の育成という教育目標を、より効果的に達成することが編成上の基本方針である。

(2) 編成上の特色

医学科、看護学科とも、「6 選択肢式等設問の回答」2-3の(2)に分類された授業科目区分を含め、将来の専門課程教育のための基礎的な能力とモチベーションを育成する上で不可欠であるとされる諸科目を必修とする一方、選択科目については、幅広い教養を涵養することを意識し、単科大学の人的及び物的制約の中でできるだけ多くの科目を開講して、学生に資するよう努めている。また、いくつかの科目では少人数教育を導入するなど、近年の教育方法の多様性に配慮した編成も行っている。

上記の目標の1)については、医学科の「哲学入門」「哲学特論」「倫理学」「医学概論Ⅰ、Ⅱ」、看護学科の「哲学」「看護基礎論」などを、これに該当する科目として開講している。2)については、人文・社会科学系において、専任教員のいる社会学、歴史学だけでなく、相当数の非常勤講師を招き心理学、教育学、地理学など多様な授業科目を開講している。自然科学系の授業科目は目標3)に該当するものとしてとらえ、専任教員と非常勤講師により多数の科目を開講するとともに、医学科では生命科学関連の科目と物理・化学・生物学3教科の実習を必修とし、看護学科では「生物学」を必修としている。さらに、医学科では「医学特論」「医学・生命科学入門」「細胞生物学」などを開講しているほか、少人数能動学習の一環として、人文社会系では「人間科学研究」、自然科学系では「基礎科学研究」を開講し、旺盛な探求心の育成を図っている。4)については、英語と情報処理学を必修とする一方、選択の外国語科目としてドイツ語、フランス語、中国語を開講している。

編成上の特色の一つに、平成8年度から始まった滋賀大学との単位互換制度がある。対象は本学の一般教

養科目と滋賀大学の全学共通科目であり、年間8単位通算16単位を限度としている。これまでのところ履修者は多くなく、交通関係の整備など支援体制に問題が残る。

(3) 授業科目の内容

(2)で分類した諸科目のうち、いくつかについて以下に内容を説明する。

1)「医学概論Ⅰ、Ⅱ」は、不妊治療や遺伝子研究がもたらす社会的影響など生命倫理のトピックについて、内外から講師を招聘するとともに、ディベートやロールプレイングなどの手法を用いて学び、さらには医療・福祉施設での早期体験学習を取り入れるなど意欲的な授業運営を行っている。

2)13年度より2年次生向けに開講された「人間科学研究」は、学生が自由にテーマを設定し、教官のアドバイスを受けながら調査研究して授業時に議論するとともに、その成果を報告書にまとめるという学生主体の少人数教育を取り入れたものである。

3)同じく少人数教育である「基礎科学研究」では、おゼン立てされた自然科学実習ではなく、自分自身で実験計画を立て、実行し、考察し、報告するという研究プロセスを体験させようというもので、物理学・化学・生物学3学科の教官が共同してアドバイスする。

4)「医学特論」は、世界の医学研究の最先端で活躍する医学研究者による1年次学生向けの講義であるが、各講師には、単に研究内容の紹介だけでなく、そのテーマを選んだ動機や研究の苦心譚に触れることによって、学生の医学へのモチベーションを高めるよう依頼している。

5)「日本語表現技法」は、学生たちが将来医師となった際に患者と良好な関係を築けるように、対人的コミュニケーション能力を育成することを目標の一つとしている。

(4) 授業科目区分ごとの履修状況

[医学科]

医学科はカリキュラム改正の初年度であるため、1年次学生のためのデータとなっている。

a「基礎人間科目」 平成12年度入学生についてみると、基礎人間科学系諸科目は全員が登録しているが、単位取得率に関しては科目によってむらがあり、厳しい結果となっている科目もある。

b「基礎生命科学」 基礎生命科学の諸科目も全員が登録しているが、途中で履修をあきらめる科目があり、それらの科目では期末試験の受験率が悪くなっている。これは学生が単位取得の容易な科目を選んでおり、今後の問題点である。

c「外国語Ⅰ」 英語は必修であり、全員が履修登録している。単位取得率も高い。

d「外国語Ⅱ」 12年度生では、4分の1がドイツ語を、4分の3がフランス語を履修している。中国語は13年度から開講された。単位取得率のやや低い科目もある。

e「総合生命科学」 全て必修科目であり、全員が履修登録している。単位取得率も高い。

〔看護学科〕

12年度生では、選択となっている「外国語科目」で履修登録の低い科目があるが、それ以外の「人文科学」「社会科学」「自然科学」「保健体育科目」「総合科目」及び必修となっている「外国語科目」のいずれの科目においても、ほぼ全員が履修している。しかし単位取得率はまちまちであって、必修となっている保健体育科目を除くと、途中で履修をあきらめる科目も多い。成績判定の段階まで進むと、単位取得率はおおむね高い。

以上のように、医学科、看護学科とも、大部分の学生が年度当初は必修科目か選択科目かを問わずほぼ全ての科目の履修登録をする。しかし、年度の途中で履修をあきらめる学生がかなりおり、最後には最低限の単位を取って進級すればよいとの風潮があって、必ずしも教官側の期待に応えてはいない。これらの学生に、如何にやる気を出させるか、が今後の問題点となろう。

〔医学科・看護学科合同授業〕

「文学」「芸術学」「教育学」などのいくつかの科目で医学科と看護学科の合同授業を行っている。同一大学同一学部でありながら、6年制と4年制などカリキュラムがまったく異なるため接点の少ない欠点を、少しでも補う役割を果たしている。

（5）学力の多様化に関しての全学規模での対応策

近年、高等学校課程において物理学、化学、生物学のいずれか1教科を履修しないまま入学する学生が増加している。これら3教科の基礎学力の欠如は、広い領域の自然科学に基盤をおく医学の教育をすすめる上で支障をきたすと考えられる。そこで、平成12年度より、1年次生前期科目として「自然科学入門」を設置し、未履修科目を集中的に修得できるよう配慮している。

(3) 教育方法

本学教養教育の基本的な方針は、単科医科大学における学生数の少なさという特徴を生かしたきめ細かで個別的な教育を行うことであろう。教官一人当たりの学生数は、附属病院に所属する診療科教官や学長などの管理職を除いても5.0人であり、10人以上が一般的である国立総合大学に比べずっと少ない。教養教育だけを取り上げれば、主としてこれを担当する教官の数は限られているためこの数字は一挙に倍以上になるが、学生数が少ないためすべての学生に目が届き、きめ細かな指導ができるという点は変わらない。チューター制度などは特にとっていないものの、教官がほとんどの学生の名前を覚え、個別的な指導が自然に行われてきている。教養教育を担当する基礎学課程においては、医学科は95人を二つのクラスに分け、また看護学科は60人を一つのクラスとしてそれぞれに担任をおいているが、トラブルを抱える学生の発見は早い。

授業形態は、語学、数学、人文・社会系の専任教官が担当する授業科目、ならびに自然科学や情報処理学などの実習科目は、上記のクラス別に時間割りが組まれており、それ以外の自然科学や非常勤講師の担当する科目などの医学科の授業は、95人の学年をまとめたものとなっている。ただし、平成13年度からは物理・化学・生物3教室が合同して行う「自然科学研究」、人文・社会系教官が合同して行う「人間科学研究」などの少人数能動学習が始まり、その成果が注目される。

「医学概論Ⅰ」及び「医学概論Ⅱ」においては、夏休みを利用して近辺の医療・保健・福祉・教育関連施設の見学や体験学習を行っている。いわゆる early exposure（早期体験学習）として、学生の評価は高い。また、ロールプレイやディベートなども取り入れた授業を行っている。

視聴覚教育の環境は当初必ずしも良好ではなかったが、平成6年度から情報処理学の教育がLL教室を改造したマルチメディア教室において1人1台のコンピュータを使って行われるようになり、この教室が他の教科にも使われるようになった。その後、平成10年度からは情報処理学の教育はマルチメディアセンター演習室へと移り、一方では一般教室にもテレビ・ビデオの設備が設置され、視聴覚教育の環境が整った。一方、学生数の少なさは教室の数に影響し、少人数の教育を行おうとするときの障害となってきたが、ここ数年の間にやっと環境が整い、平成13年度からは十分な数の教室が使えるものと思われる。さらに学習環境で特記すべきことは、図書館に24時間自動入退館システムが導入されていることであろう。

成績評価法としては、特記すべきものはない。

5 変遷及び今後の方向

滋賀医科大学は、開学以来一般教育の課程を特に「基礎学課程」と名付け、その重要性を全学的に意識してきた。その後専門教育重視の全国的な流れの中で、基礎学課程は当初の2年から1年9ヶ月、ついで平成11年度からは基本的に1年6ヶ月となった。平成6年発足の看護学科においては、語学を除けば基本的に1年間が一般教育に当てられている。一方では、大綱化以降全国的に起こった教養部解体の動きは単一学部である本学には波及せず、むしろ一般教養教育の主体としての総合教養教育機構の設置以後、一般教育は全学的に取り組むべきものとの認識が高まった。

開学時、1キャンパス内にある単科医科大学の特徴を生かして6年一貫教育を謳ったが、総合大学医学部ほどではないにせよ、一般教育と専門教育の壁は必ずしも薄くはなかった。医学科におけるカリキュラムは、当初は人文・社会系を重視する「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」ものであり、「医学史・医学概論」や「臨床心理学」を開講する点に医学部の特徴が現れている程度であったが、平成11年度からは「医学概論」を「医学史」から切り離してその内容を充実させ、早期体験学習、ロールプレイ、ディベートを含む「医学概論Ⅰ」及び「医学概論Ⅱ」とするとともに、日本の医学研究の最先端で活躍する研究者を招く「医学特論」、現代医学・生命科学の全体像を知るために全学の基礎医学及び臨床医学の教官が講義する「医学・生命科学入門」、さらに平成13年度からは化学・生化学の教官が協力して講義する「細胞生物学Ⅰ」を開講するなど、学生のモチベーションを高める方向に重点を移している。また、専門課程（基礎）における「少人数能動学習」の試行に伴い、基礎学課程においても、自然系では「基礎科学研究」、人文社会系では「人間科学研究」を開講し、少人数で学生の能動的な学習能力の育成を試みる。さらに一層の国際化とコミュニケーション能力の育成を目指し、外国語科目の増加と「日本語表現技法」を開講する。これらの改革はここ数年の間に急激に行われたため、その成果を検証し、手直しや一層の充実を図ることはこれからの課題となる。一方、看護学科においては開学以来7年を過ぎ、カリキュラムの見直しを行いつつある。

昨今教養部解体に伴う問題点が多く指摘される。一方では医療過誤の多発などの問題が顕在化するにつれ、医学部における教育が技術的なものに偏りすぎているのではないかと、との指摘もある。本学では一般教養教育における責任体制は明確であり、教養部解体に伴う

負の弊害を蒙ることはなかった。また、豊かな人間性の涵養に関しても、十分な教育がなされていると自負している。しかし、学生の質の多様化と自主性の欠如という問題は共通して存在する。前者については、高等学校での未履修者を対象に「自然科学入門」を開いて大学における物理学・化学・生物学教育の出発点を調整しているが、後者については、現在取り組みつつある少人数能動学習を柱に、如何に学生のやる気を引きだしていくかが今後の課題となろう。

4-2-5 一般教養に関する教育の授業科目の履修状況

(1) 平成12年度

授業科目区分名	最小値 〔人〕	平均値 〔人〕	最大値 〔人〕
医学部医学科			
基礎人間科学	95	95	95
基礎生命科学	95	95	95
外国語科目I	95	95	95
外国語科目II	40	47.5	55
総合生命科学	95	95	95
医学部看護学科			
人文科学	60	60.8	61
社会科学	60	60.6	61
自然科学	61	61	61
外国語科目	9	49.5	61
保健体育科目	60	60.5	61
総合科目	61	61	61

(2) 平成12年度

<1> 分母を履修登録した学生数とした場合>

授業科目区分名	最小値 〔%〕	平均値 〔%〕	最大値 〔%〕
医学部医学科			
基礎人間科学	44.2	84.6	98.9
基礎生命科学	32.6	91.7	100
外国語科目I	96.8	98.4	98.9
外国語科目II	80.0	95.0	100
総合生命科学	95.8	97.5	98.9
医学部看護学科			
人文科学	82.0	93.8	100
社会科学	73.8	93.1	98.4
自然科学	62.3	88.1	98.4
外国語科目	47.6	94.9	100
保健体育科目	98.3	99.1	100
総合科目	65.6	83.2	98.4

<2> 分母を成績判定を行った学生数とした場合>

授業科目区分名	最小値 〔%〕	平均値 〔%〕	最大値 〔%〕
医学部医学科			
基礎人間科学	45.7	88.0	100
基礎生命科学	81.0	96.2	100
外国語科目I	98.9	99.5	100
外国語科目II	82.1	96.8	100
総合生命科学	96.8	98.7	100
医学部看護学科			
人文科学	100	100	100
社会科学	86.2	97.6	100
自然科学	95.0	98.6	100
外国語科目	83.3	99.5	100
保健体育科目	98.3	99.1	100
総合科目	67.3	91.6	100

(3) 平成12年度

平均値 (単位)	最大値 (単位)
医学科	
85.8	101
看護学科	
41.1	47
全体	
70.1	101

4-3-2 一般教養に関する教育の授業科目における履修登録者数の上限設定

人数区分	授業科目区分名	授業科目名
1. 20名以下	基礎人間科学	人間科学研究
	外国語科目II	ドイツ語 フランス語 中国語
2. 21名以上 ～50名以下	基礎生命科学	基礎科学研究
3. 51名以上 ～100名以下		
4. 100名超		

4-3-3 一般教養に関する教育の授業科目におけるシラバスの実施状況

(1)

1

・「2」を選択した場合

授業科目区分名

・「3」を選択した場合

学部名

授業科目区分名

・「4」を選択した場合、以下の欄に具体的に記述してください。

(2)

1, 3, 4, 6

・「7」を選択した場合、以下の欄に具体的に記述してください。

(3)

3

(4)

1

・「4」を選択した場合、以下の欄に具体的に記述してください。